

日本列島の東北地方と九州地方の後期旧石器時代石器群の比較研究

柳田 俊雄

東北大学総合学術博物館

Comparative research on the Late Paleolithic industries between Tohoku and Kyushu regions in the Japanese islands

Toshio Yanagida

The Tohoku University Museum, 6-3 Aoba, Aramaki, Aobaku, Sendai, 980-8578 Japan

Abstract. In this paper, I compared the Late Paleolithic industries between Tohoku and Kyushu regions in the Japanese islands by observing the "Black Band" layer in these regions as a key layer. The study shows that the obvious distinctions in lithic assemblages between Tohoku and Kyushu regions appeared above the Black Band layer. However, the initial differentiation of the assemblages between these regions seems to have started from the chronological phase within the Black Band layer.

Key words : Comparative research, Tohoku, Kyushu, Black Band, Late Paleolithic, Japanese islands,

1. はじめに

研究当初において、日本列島の後期旧石器時代に石器製作の上で地域的な違いがみられるという指摘があった（芹沢 1963 鎌木 1965）。今でも東日本と西日本では発見される石器群の様相に違いが有ることは明らかである。一つは石器群中に見られる組成上の異なりであり、さらにはその利器類中のナイフ形石器の形態上の違いである。前者は東北地方においてはエンド・スクレイパー、彫刻刀形石器が多量に含まれるのに対して、九州地方ではそれらが僅少である。一方、九州地方では多くの型式の台形石器が検出されるのに対して、東北地方ではそれらが少ない。いま一つは、東北地方の石器群は長大な「縦長剥片」を連続剥離する石刃技法が主体となるのに対し、瀬戸内海周辺地域では規格性の強い横長剥片を剥離する瀬戸内技法、九州地方では縦長・横長・幅広剥片を生産するような多様な剥片生産技術がみられる。西南日本では縦長・横長・幅広な剥片を素材とする利器類が豊富に製作されており、その様相が複雑である。これらの違いに起因するものは、原産する石材の違いからくるもの（鎌木 1965）、系統的な違いによるもの（大井 1968）、さらには歴史的、地域的な違いによるもの（小

野 1969）との理由があげられ、考古学的、文化史的な解釈が示された。

その後、南関東地方の武蔵野台地の層位的な事例が増加し、この地域では「自然層」の細分名を用いた「文化層」の設定がなされ、各時期の石器群が段階的に発展するものと解釈された（小林・小田ほか 1971）。彼らは、この地域の編年の構築にとどめるだけでなく、日本列島内の近畿地方や九州地方の西南日本、さらには東北地方にまで拡大解釈し、日本列島内の地域性を無視した後期旧石器時代の文化史像を描こうとした。確かに、恵まれた関東地方の第四紀の厚いローム層は当地域の編年の組立に役立つだろうが、後期旧石器時代の日本列島内の地域性をもつ文化史を描くには、各地方の比較検討なしに記述するのは難しい。また、武蔵野台地の野川遺跡では A T 上位の「第 IV 層下相当」から発見された横長剥片を素材とした鋸歯状に加工されたナイフ形石器を瀬戸内地方の「国府型」との類似性が指摘され、異質の石器に対して他地域からの影響とされた。1976 年には鹿児島県始良火山を起源とする A T テフラ（以下、A T と呼称）が発見され（町田・新井 1976）、1980 年以降は全国的規模でそれを基準とした編年案が提出されていく。下総台地、武蔵野台地、相模野台地では、台地ごとの編年

が整備され、南関東地方の後期旧石器時代石器群の対比と比較検討が精緻にすすめられている。

本稿の研究目的は、日本列島の後期旧石器時代において地域的な違いがいつ頃から顕著に現れるのかを明らかにすることにある。ここでは、一地域に限定した石器群の編年観から異質の様相を看取するような方法をとらずに、日本列島内の二つ地域の石器群を比較しながら、地域的な違いが出現する時期を検討する。比較するにあたって、大陸と近接していたと推定される北海道地方と津軽海峡によって遮断された東北地方、同様に大陸と朝鮮海峡によって切り離された九州地方の二地域を取り上げる。選択した二つの地方は日本列島内にありながら地理的には遠隔地であることから、比較する上で東北地方と九州地方の石器群を時間的に整理しておく必要がある。小論では、両地域の後期旧石器時代石器群を時間軸でまず検討し、東西の類似性と相違性を比較しながら、地域的な違いがいつ頃から顕著に現れるのかを明らかにしたい。

2. 東北地方と九州地方の比較検討する方法

— 時間軸の設定 —

岩宿遺跡の調査で石器が潜む関東ローム層中に「やや黒くなった層」が確認された。この層中から岩宿Ⅰの石器群、その上位の「黄褐色土層」から岩宿Ⅱの石器群が層位的に検出された(杉原荘介編 1955)。上・下の層相の違いによって出土する石器群の内容が異なることから、「やや黒くなった層」については「黒色帯」や「暗色帯」と呼称され、関東ローム層中の一つの鍵層として認識されるようになった(戸谷・貝塚 1956)。以後、関東ローム層での旧石器時代の調査が進展する中で、色調の濃淡に違いがみられるものの、「黒色帯」・「暗色帯」は層序の対比の上で一つの重要な鍵層となっていく。

考古学者でいち早く、この層を基準に石器群の編年に採用しようとしたのは芹沢長介である。芹沢は関東ローム層中の「黒色帯」に着目し、その中位や上位から発見される石器群に相違があることを指摘した。この出土状況の差を基準に関東地方で「(blade) → ^(切出形石器)ナイフ・ブレイド」の順序があるとした。(芹沢 1956)。さらに約10年を経た南関東武蔵野台地の野川遺跡群の大規模発掘調査では、立川ローム層中の二枚の「黒色帯」を基準に各文化層の設定と時期区分を用いた編年案が示された(小林・小田・羽鳥・鈴木 1971)。

2006年と2009年に、筆者も東北地方で発見される「暗色帯」、九州地方で「黒色帯」といわれる古土壌を基準にした後期旧石器時代の地域編年案を提示した(柳田 2006・同 2009)。拙稿では、日本列島で後期更新世の立川期のローム層中にある鹿児島県始良火山を起源とするATテフラ(以下、ATと呼称)を援用しながら、その直下に発達する「暗

色帯」、「黒色帯」を基準にして石器群を層位的に整理し、後期旧石器時代の編年をおこなった。また、東北地方の「暗色帯」は九州地方に比べると色調が淡く、観察がしにくい。しかし、遺跡によって「暗色帯」は濃淡差がみられ、さらに細分することも可能であった。九州地方ではATの下位に黒味の濃い「黒色帯」が発達する。一部の遺跡で「黒色帯」中の上部にATが含まれる場合もあるが、多くはその上位で確認されている。本稿では東北地方の「暗色帯」と九州地方の「黒色帯」を共時的層と解釈し、これらの層を時間軸の基本としながら両地方の石器群を比較検討してみたい(第1図)。

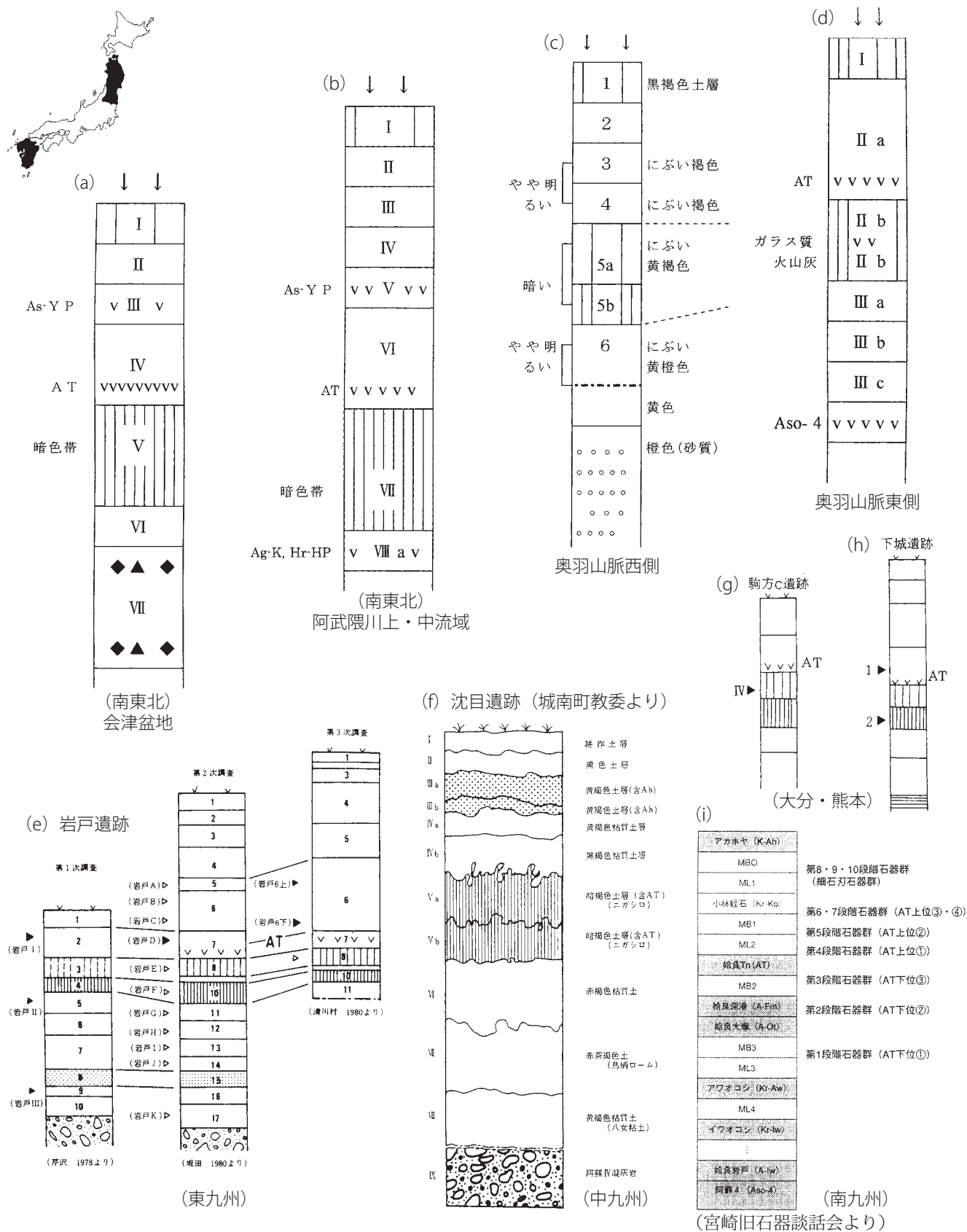
1) 東北地方の「暗色帯」と九州地方の「黒色帯」の下位から出土する石器群

東北地方では、筆者の調査経験から南部地域の会津地方、阿武隈川上・中流域、奥羽山脈東側地域の名取川流域、北上川中流域一帯で「暗色帯」が確認される(柳田 2004)。北上川中流域一帯は、その支流である奥羽山脈に起源をもつ和賀川、胆沢川等周辺で多くの河岸段丘や扇状地を形成している。この地域では高位から順に西根段丘、村崎野段丘、金ヶ崎段丘が発達し、後者の二つ段丘面に黒沢尻火山灰が堆積する。その下部には焼石・村崎野軽石(Mp)・山形軽石(Yp)がみられ、上位に褐色ロームが堆積する。村崎野軽石・山形軽石を含む褐色ロームが黒沢尻火山灰層と呼称され(中川ほか 1963)、この層中にATや東北地方南部で見られた「暗色帯」に相当する層が存在する。北上川中流域一帯ではこれらの軽石層前後で石器群が発見されている。また、東北地方南部でも「暗色帯」に相当する層の下部から石器群が出土している。最も古い石器群は「暗色帯」下部やその抜けた層から検出される石器群で、当地方では後期旧石器時代第1期とした一群である(柳田 2006)。

九州地方では基本的にATの下位で黒味の濃い「黒色帯」が発達する。当地方では「黒色帯」の上部とその直上に「AT」が存在する。それらはセットとして把握することも可能である。「黒色帯」は、ほとんどの地域で確認でき、九州地方の共時的な層と見なすことができる。ここでは「黒色帯」の下位にある黄褐色ローム層や赤褐色粘土質土層から出土した石器群を二群に分けた(柳田 2009)。

2) 東北地方の「暗色帯」と九州地方の「黒色帯」の中から出土する石器群

東北地方では濃淡差があるものの「暗色帯」が発達する。奥羽山脈東側の北上川中流域一帯では「暗色帯」中に「ガラス質淡黄褐色火山灰」が発見され、このテフラはAT層準より下位に位置していることが判明している。北上川中流域の和賀川周辺の峠山牧場ⅠA遺跡では、「暗色帯」中に「ガラス質淡黄褐色火山灰」が発見されており、このテフラを挟んで上・下二枚の石器群が確認されている(高橋・菊



第1図 東北地方と九州地方の旧石器時代の層序

池 1999)。また、奥羽山脈西側の山形県新庄盆地の上ミ野 A 遺跡でも「暗色帯」が発見され、筆者は色調から濃淡によって二枚に細分した(傳田ほか 2012)。「暗色帯」中の石器群を第 2 期とした(柳田 2006)。

九州地方では A T の下位に黒味の濃い「黒色帯」が発達する。一部「黒色帯」中の上部に A T が含まれる場合もあるが、その多くは「黒色帯」の上位に存在する。中九州では上部に黒味の薄い層、下部に黒味の濃い層がある。その色調の違いから筆者は九州地方第 2 期の石器群を「古段階」と「新段階」とに細分した(柳田 2009)。本論では東北地方と九州地方の「暗色帯」・「黒色帯」を共時的な層と見なし、これらの層中から発見された石器群を第 2 期とし、古・新の二段階に細別して論をすすめることにする。ただし、東北地方では「暗色帯」の発達が弱いので、遺跡やその周辺で A T と「暗色帯」がセットで発見された石器群を中心に取りあげ、比較検討する。

3) 東北地方の「暗色帯」と九州地方の「黒色帯」の上位から出土する石器群

東北地方の岩手・山形・福島県側で、A T が「暗色帯」上位から発見されており、この上位にある黄褐色ローム層中から発見される石器群を筆者は第 3 期とし、この地域も第 3a 期(古)、第 3b 期(新)とに細分した。当地方では、古い一群が「暗色帯」の上位で、その直上の時期、新しい一群は第 3a 期上位にあって、石器組成に「尖頭器」が伴うものとした。また、岩手県和賀川流域大渡 II 遺跡の泥炭層中に A T が発見され、その上・下から石器群が出土している。本論ではこの資料群も編年研究の基準に活用する(中川・吉田 1993)。

九州地方では A T と「黒色帯」をセットで確認することができる。九州地方第 3 期は「暗色帯」の上位の褐色・黄褐色層から発見された石器群である。当地方南部に位置する宮崎地域では韓国岳を起源とする小林軽石(約 1.6 万年前)がみられ、その上位から細石刃石器群が発見される(宮崎旧石器談話会 2005)。九州地方では、小林軽石の下位から発見される石器群、それに類似する石器群を上限とする。この地方も第 3 期は出土層位と石器群の技術的な特徴から、古段階(第 3a 期)、新段階(第 3b 期)とに細分した(柳田 2009)。九州地方においてはテフラや、考古学的な層位から勘案して、古い一群は A T 層準に近接する時期、新しい一群は第 3a 期上位、小林軽石層準より下位にあって、細石刃石器群出現以前の石器群とする。第 4 期は第 3b 期(新)より上位にあって、細石刃石器群が出現する時期とする。本論では当該期の石器群を比較検討の対象としない。

以上、筆者は日本列島で確認されている A T を援用しながら約 4 万年以降の立川ローム期に発見された東北地方の「暗色帯」、九州地方の「黒色帯」を共時的層と解釈し、これらを活用して時間軸を整理する。

3. 東北地方と九州地方の石器群の比較

1) 「暗色帯」・「黒色帯」の下位から出土する石器群

a. 東北地方

東北地方では「暗色帯」の下位にある褐色ローム層の中から発見された北上川中流域の石器群が最も古い一群と考えられる。「暗色帯」に相当する層の下位から発見される石器群として岩手県遠野市金取遺跡(菊池 1986、黒田 2005)、同県金ヶ崎町柏山館遺跡(岩手県教育委 1986)があげられる。北上川支流である達曾部川の河岸段丘上に位置する金取遺跡では約 5～5.5 万年前の山形軽石層(Y p)、村崎野軽石層(M p)を挟んで安山岩、黒色頁岩、チャート、ホルンフェルス化した粘板岩等を使用の金取 III・IV 層石器群が発見されている。これらの石器群は、石斧、周辺部を面的に調整加工したバチ形の縁辺加工石器、円盤形石核から剥離した台形状剥片、小形剥片類を組成する。石刃・縦長剥片の剥離技術の痕跡がみとめられない。これらの石器群は前期旧石器時代の資料群と呼称されている。金取 IV 層石器群は「暗色帯」の下位にある村崎野軽石層の下の層から発見されている。この下限は阿蘇 4 テフラ(7～9 万年前)より新しく、出土層位、石器組成、石器製作技術から推定すると約 5 万年前後に位置づけられる。調査者が指摘するように、金取 IV よりも後出する金取 III の石器群は約 4～5 万年前と考えられ、後期旧石器時代に先行する時期に相当しよう。この他、山形県飯豊町上屋地 B 遺跡の石器群(加藤 1977)や、宮城県名取川流域の仙台市上ノ原山遺跡 9 層の石器群(主浜 1995)が当該期に相当すると考えられる。

次に東北地方南部では「暗色帯」下位から発見された石器群に阿武隈川中流域の平林遺跡(木本ほか 1975、藤原 1988)、乙字ヶ滝遺跡(柳田・早田 1994)、会津地方に笹山原 No.7 遺跡(会津若松市教委 1986)があげられる。これらの石器群は東北地方南部で後期旧石器時代第 1 期に位置つけた一群である。最も古い一群は「暗色帯」の抜けた層から検出された平林遺跡の石器群である(第 2 図-38～42)。不定形の剥片を素材とし、打面を基部側とし、その周辺に部分的な二次加工した粗雑なナイフ形石器が組成する。この調整加工は浅く、面的である。剥片生産技術は打面と作業面を頻りに移動させながら、不定形の幅広な剥片を剥離する技術である。一部に円盤状の石核もみられる。多くは打面や作業面の定まらない技術で剥離され、剥片の形状が幅広で、形態が不揃いである。また、剥片を素材とした石核に腹面側のポジ面を取り込むように剥離が進行する剥片生産技術も存在する。縦長を呈するような剥片類が存在するが、両側辺の併行するような「石刃」を剥離するような技術はみられない(藤原 1988)。後期旧石器時代初頭の時期の石器群と考えられる。次に、乙字ヶ滝遺跡(第 2 図-34～37)は、刃部磨製石斧、浅く二次加工された台形様石器、基部加工したナイフ形石器、彫刻刀形石器、錐



第2図 暗色帯下位・中位出土の石器（東北地方）

形石器、スクレイパーで構成される石器群である^{注1}。平林遺跡とは、石器組成、二次加工技術、剥片生産技術が大きな相違がみられないが、乙字ヶ滝遺跡には刃部磨製石斧が検出されている。また、石材に流紋岩、凝灰質頁岩、メノウ、玉随、石英、チャート等が使用されている。

b. 九州地方

九州地方では「A Tテフラ」と「黒色帯」を全地域でセットとして確認することができ、これらを当地方の共時的な層と見なすことが可能である。基本的に「黒色帯」は「A Tテフラ」の直下に発達する。当地方の「黒色帯」の下位にある黄褐色ローム層や赤褐色粘土質土層から出土した石器群を後期旧石器時代第1期とした(柳田 2009)。第1期はA、Bの二グループに細分される。Aグループは、石器組成が打製石斧、幅広剥片の一部に僅かな調整加工を施したナイフ形石器、形状をバチ形に仕上げるために周辺を加工した石器、彫刻刀形石器、錐形石器、鋸歯縁石器で構成される。スクレイパー類は周縁部を二次加工するのを特徴とし、一側辺のみの形態や二側辺を収斂させて尖頭部を作り出す形態がある。利器類に施される二次加工技術は面的な調整で浅い。剥片生産技術は、剥片を素材とした石核に腹面側のポジ面を取り込むように剥離が進行するものや、打面と作業面が頻繁に入れ替わるものがある。また、祖型石刃技法のような「縦長剥片」志向の剥離技術がみられる。石材はスレート、黒曜石、安山岩、流紋岩、玉随、鉄石英、チャートが使用され、地元産の石材が各遺跡で多用される。黒曜石の利用頻度は低い。この時期の石器群は、大分県岩戸遺跡第Ⅲ文化層(第3図-43~45)(芹沢編 1978)、宮崎県後牟田遺跡第Ⅲb文化層(第3図-46~48)(橘・佐藤・山田 2002)、熊本県沈目遺跡(清田編 2002)の石器群があげられる。

Bグループは、浅く二次加工された台形様石器、基部加工したナイフ形石器、打製石斧、刃部磨製石斧、彫刻刀形石器、錐形石器、スクレイパーが組成する。利器類に施される二次加工技術は調整が急峻ではなく、面的である。基盤となる剥片生産技術は、剥片を素材とした石核に腹面側のポジ面を取り込むように剥離が進行するもの、打面と作業面が頻繁に移動するものがある。量的に少ないものの、形状に二側辺が平行するような「縦長剥片」がこのグループに見られる。石材にスレート、黒曜石、安山岩、流紋岩、玉随、石英、チャート等が使用され、近場で採集できる原石が活用される。この時期の石器群は、大分県牟礼越遺跡第1文化層(第3図-39~42)(大分県三重町教委 1999)、熊本県曲野遺跡Ⅵ層(第3図-35~38)(熊本県教委 1984)、同県石の本遺跡-8区-Ⅵb層、宮崎県山田遺跡下層、同県赤木遺跡下層、同県音明寺第2遺跡下層、同県東畦原第1遺跡下層、同県中ノ迫第2遺跡下層、同第3遺跡下層、同県矢野原遺跡下層、同県尾立第2遺跡X層

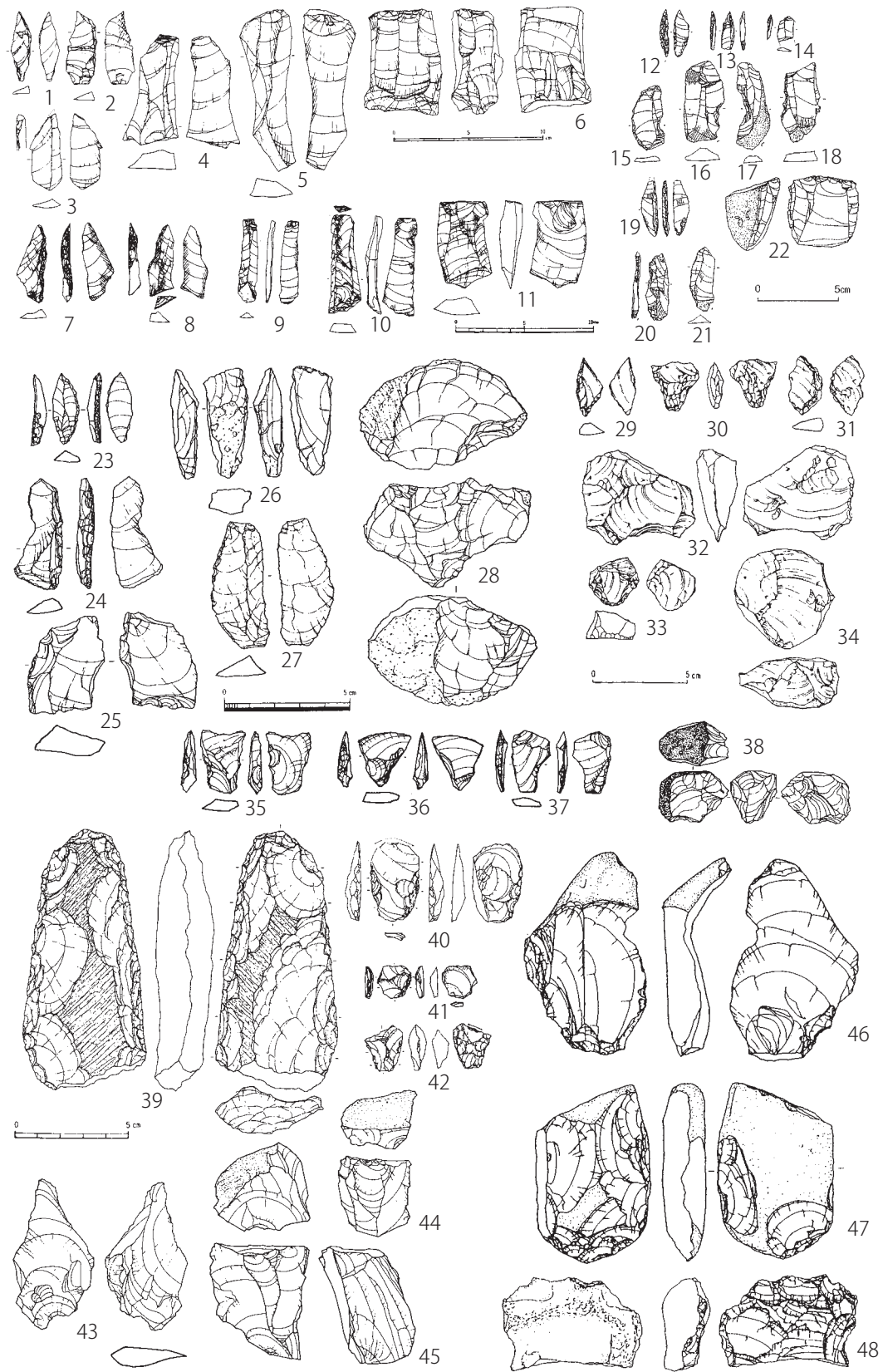
の石器群等があげられる。Bグループは、刃部磨製石斧が組成する。第1期のA、Bグループの違いは石器組成に刃部磨製石斧の有無があげられる。宮崎県下では当該期に礫器が共伴する。また、石の本遺跡のように刃部磨製石斧に二側辺が収斂する形態と鋸歯縁をもつ形態のスクレイパー類が共伴して発見される石器群も存在する(池田 1999)。石の本遺跡は古い様相と新しい様相の特徴を保持する石器群といえよう。第1期は複雑である。

c. 東北地方と九州地方の比較

両地方「暗色帯」や「黒色帯」下位にある石器群はいくつかの時期に分けられるが、最古の一群とされる東北地方の金取遺跡、柏山館遺跡、九州地方では早水台遺跡下層、福井洞穴遺跡第15層の石器群等は、後期旧石器時代に先行する時期と考えられるので、これらは比較対象外とし、省略する。

両地方では「暗色帯」・「黒色帯」の下位の層から発見された石器群を後期旧石器時代の初頭の時期として二グループに分けた。以下、両地域を比較検討してみる。

- i) 両地方は後期旧石器時代初頭の時期は、両面・半両面加工の石器、基部加工のナイフ形石器、鋸歯縁スクレイパーが組成する点で共通している。両地方に先行する前期旧石器時代の石器群の特徴が一部に残存してみられる。
- ii) 両地方は先行する時期の石器群に打製石斧が見られるが、九州地方ではAグループにも継続して製作され、Bグループには磨製の技術が存在する。東北地方では平林遺跡や笹山原No.7遺跡に打製石斧は発見されていないが、乙字ヶ滝遺跡に刃部磨製石斧が存在する。両地方では、第1期に刃部磨製石斧や打製石斧が出現する点で共通する。
- iii) 石器の二次加工技術に面的なものから急峻なものへ変化する様相は両地域が類似する。
- iv) 両地方の剥片生産技術は、打面と作業面が頻繁に移動するような剥離技術、円盤形石核から三角形や台形を呈する幅広剥片を剥離するような技術が主体を占める。また、幅広剥片や剥片の一部にポジティブな面を残す貝殻状剥片を剥離するような剥片生産技術も存在する。
- v) 両地方の第1期には剥片生産技術の中で二側辺が平行するような「縦長剥片」が出現するが、量的に僅少である。また、寸詰まりの石刃や数枚の縦長剥片類を剥離する祖型石刃技法が存在するものの、打面を固定し、打面や作業面を頻繁に調整するような技術をもつ石刃技法が見られない点は共通している。
- vi) 石材には流紋岩、ホルンフェルス、安山岩等が使用されている例が多く、僅かにチャート、水晶、黒曜石、ホルンフェルス等が利用されている。在地性の石材を多く採集し、使用する点で両地方は類似している。



第3図 黒色帯下位・中位出土の石器 (九州地方)

以上、第1期は両地域で石器製作技術に共通した様相が指摘できる。

2) 「暗色帯」・「黒色帯」の中から出土する石器群

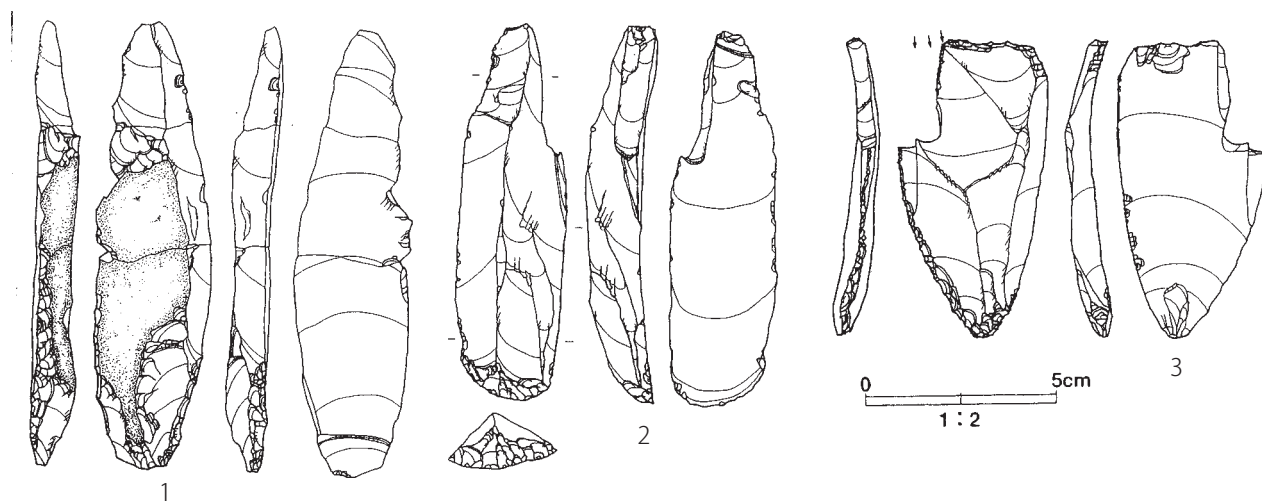
a. 東北地方

筆者は「暗色帯」中の石器群を後期旧石器時代第2期とした(柳田 2006)。

岩手県北上川中流域では「暗色帯」に対応する層中に地元産の「ガラス質黄褐色火山灰」が存在し、それを挟んで上・下二枚に石器群がある。また、奥羽山脈西側の山形県新庄盆地周辺でも「暗色帯」を色調の濃淡によって細分することが可能である。筆者は拙稿等で古段階と新段階に分けて論じたことがある(柳田 2004、同 2006、傳田ほか 2012)。

第2期古段階の石器群は岩手県峠山牧場Ⅰ遺跡A地区第1文化層(第2図-26・27)、同県上萩森遺跡Ⅱb層(第2図-28~33)、秋田県風無台Ⅱ遺跡(第2図-18~25)、同県松木台Ⅱ遺跡(大野ほか 1985)、同県地藏田B遺跡等があげられる。これらは「暗色帯」の下部から発見されている。上萩森遺跡では「暗色帯」に対応する層中に地元産の「ガラス質黄褐色火山灰」が存在し、その下位から上萩森Ⅱb文化層が発見されている(柳田 2004)。石器群は刃部磨製石斧、台形様石器、ペン先形のナイフ形石器、先端部の一部に二次加工を施すナイフ形石器がみられる。また、台形様石器の一群は、打面と作業面を頻繁に移動させながら、幅広な剥片を剥離するものであり、中には剥片素材石核から作出されるものも存在するが、米ヶ森技法のような定型化したものは存在しない。連続的に縦長剥片類を剥離するような石刃技法は見られない(菊池 1988 鹿又 2005)。

第2期新段階の石器群は「暗色帯」の上部から発見される一群である。峠山牧場Ⅰ遺跡A地区からは第2文化層の石器群が「暗色帯」に相当する層中より発見され、「ガラス質黄褐色火山灰」の上位から出土した。また、ATは第2文化層の石器群の上位より検出された。この石器群は刃部磨製石斧、台形様石器、ペン先形のナイフ形石器、石刃の基部の両側辺、先端部の一部に二次加工を施すナイフ形石器が組成する。石刃を素材とするナイフ形石器は、打面側を基部とし、その両側辺と先端部に調整加工を施す形態が多い。基部側の加工は未加工の平行する両側辺とは明瞭に区分され、形態が逆「ハ」の字を呈する。打面を残置する例が多い(高橋・菊池 1999)。ナイフ形石器の素材は、単設打面や両設打面の石核で、調整技術の未発達な石刃技法から剥離された縦長剥片類である。単設打面石核から剥離された石刃は形状が先細りになるのに対し、両設打面のは幅広になる傾向にある。板状の原石の稜を巧みに利用して石刃を剥離する技術がみられる。台形様石器は、打面と作業面を頻繁に移動させながら幅広な剥片を剥離するものが素材となっており、中には剥片素材石核から剥離されるものもみられる。第2期新段階の石器群は福島県笹山原A遺跡(第2図-15~17)(柳田 1995)、同県一里段A遺跡下層、同県大谷上ノ原遺跡、岩手県南部工業団地内遺跡U区、秋田県風無台Ⅰ遺跡(第2図-7~9)(大野ほか 1985)、同県小出Ⅰ遺跡等の石器群があげられる。第2期新段階後半と考えられる秋田県此掛ヶ沢Ⅱ遺跡、同県下堤G遺跡(第2図-1~6)(菅原 1983)の石器群には単設打面の石核から約3~7cm前後のサイズの先細りでやや寸詰まりの石刃が多量生産される。ナイフ形石器の二次加工技術も急峻な加工が多くなる。また、剥片を素材としてその背面側を打面、腹面側を作業面と固定しながら台形、貝殻状の小形の剥片類を連続剥離するような技術は「米ヶ森技法」とし



第4図 大渡Ⅱ遺跡第1文化層(東山系石器群)

て発達する(富樫・藤原 1977)。整然とした米ヶ森技法で製作された米ヶ森型台形様石器は両遺跡からも発見されている。さらに、奥羽山脈東側の岩手県大渡Ⅱ遺跡では泥炭層中のA Tテフラの直下から東山系の石刃石器群が発見されている。(第4図-1~3)。第1文化層の石刃技法は打面部や作業面に丁寧に調整を施し、長大な石刃を多量に生産している。この石器群は、大形石刃の打面部や先端部に二次加工を施した変形度の少ないナイフ形石器、石刃の末端に急斜度の刃部を作成したエンド・スクレイパー、石刃の末端へ直角に彫刻刀面を刻んだ彫刻刀形石器を特徴としている(中川・吉田 1993)。大渡Ⅱ遺跡では「暗色帯」が発見されておらず、第1文化層の石器群を第2期として直接的に把握するのは困難である。しかし、岩手県峠山牧場Ⅰ遺跡A地区や北上川中流域の調査事例から勘案すると(菊池 1996)、A Tは「暗色帯」の上位に存在するものと考えられることからA Tテフラの直下から出土した大渡Ⅱ遺跡第1文化層の石器群は、第2期の最終時期に位置づけられるものと推定される。この手の石刃技法と石刃の基部側や先端に二次加工するナイフ形石器は従来の「東山系」といわれる石器群に類似する。同様な石刃石器群が新潟県樽口遺跡(立木 1996)にもみられ、調整技術の発達した石刃技法の出現は東北地方ですでにA T降灰以前の時期から始まっている。東北地方では、調整技術の発達した石刃技法が第2期の最終時期に出現することになる。

b. 九州地方

当地方では一部「黒色帯」中にA Tが含まれる場合もあるが、基本的にはA Tの下位に黒味の濃い「黒色帯」が発達する。大分県大野川流域、筑後川源流の熊本県杖立川流域の中九州地方では上部に黒味の薄い層、下部に黒味の濃い層が観察された。熊本県下城遺跡(第3図-23~28)では「黒色帯」中の色調に濃淡がみられ、下城第2文化層は下部の濃い層から発見された(緒方・古森 1980)。一方、大分県駒方古屋(第3図-1~6)(橘 1985)、駒方C遺跡(第3図-7~11)(吉留ほか 1984)では「黒色帯」中の色調が薄い上部の層から発見された。中九州地方での石器群の出土状況から、ここでは九州地方第2期をA・B群に分け、時間差のある二グループに細別した(柳田 1986)。A群を九州地方第2期古段階、B群を九州地方第2期新段階と呼称する(柳田 2009)。

古段階は石器組成が台形石器、小形の切出形ナイフ形石器で構成される。小形で縦長・幅広の剥片類が石器の素材に供されている。打面と作業面が一定しない石核類が多く発見される。石核の形状は多面体を呈する。古段階には縦長剥片類を連続剥離する技術がみられない。熊本県下城遺跡第2文化層、鹿児島県上場遺跡第6層の石器群(第3図-29~34)があげられる(池水 1967)。熊本県狸谷遺跡第1文化層の石器群は、A Tの下位の層中にあり、暗褐色

色の第VII層が、「黒色帯」に相当する可能性がある。第1文化層からは小形の剥片を素材とした斜め整形の二側辺加工、一側辺加工、部分加工のナイフ形石器、スクレイパー、彫刻刀形石器、錐形石器等が検出されている^{注2}(木崎 1987)。この石器の素材は、一部に縦長の剥片が看取できるものの、打面の一定しない石核から剥離された寸詰まりの剥片類である。石刃技法の存在は確認できない。しかし、斜め整形の二側辺加工、一側辺加工、部分加工のナイフ形石器等が発見されている。古段階に位置づけられる可能性がある。古段階は上述した石器群以外に西北九州では長崎県上原B遺跡の石器群も当該期と考えられる。

一方、新段階は大野川流域で確認された駒方古屋、駒方C第III文化層、百枝III文化層の石器群が相当する。新段階の石器群は両側辺が平行した縦長剥片類を連続的に剥離した石刃技法である。剥離された石刃は形状が縦長である。作業面の頭部に調整がなされるものの、打面部や作業面に丁寧な調整がみられない。これらは調整技術が未発達な石刃技法といえる。石器組成に縦長剥片を素材とし、斜めに整形した二側辺加工、一側辺加工、部分加工のナイフ形石器、スクレイパー、彫刻刀形石器がみられる。しかし、彫刻刀形石器やエンド・スクレイパー類は僅少である。西北九州では新段階の石器群が二ヶ所の遺跡で確認されている。一つは、長崎県平戸市堤西牟田遺跡(第3図-12~21)で「黒色帯」に相当する第4層上位から発見された石器群である。石材に黒曜石が利用されている。この石器群には二種類の剥片生産技術がみられ、その一つが「磯道技法」と呼称される石刃技法である。その接合資料を観察すると、石刃の打面部には丁寧な調整痕がみられ、石刃の剥離ごとに打面部へ細かい調整剥離がおこなわれている。石刃を素材としたナイフ形石器の形状は、斜め整形の二側辺加工、一側辺加工、部分加工の三形態が見られる。萩原はこれらの石器群に剥片尖頭器、三稜尖頭器が組成されないことから、東九州地方の「黒色帯」中の石刃技法に類似することを指摘している(萩原 1985)。堤西牟田遺跡第4層上位で発見された石器群も新段階の時期に相当しよう。いま一つは、佐賀県肥前町磯道遺跡の石器群である。約3,000点の黒曜石製の石器が出土している(副島・伴 1985)。この石器群はその接合や平面的な集中区のあり方から、一つの時期のものとして推定されるが、同一層中に細石刃、同石核も検出されており、接合資料以外の共存の確実性については再検討の必要がある。細石刃、同石核を除外すれば、石器組成には斜めに整形する二側辺加工、一側辺加工、部分加工の三形態のナイフ形石器、スクレイパー、彫刻刀、台形石器が見られる。また、この石器群には剥片尖頭器、三稜尖頭器、「百花台型」と呼ばれるような小形化した台形石器が存在しない。当遺跡では個別ごとに資料が接合・復元されており、縦長剥片類や石核類に石刃技法の存在が看取できる。石刃技法は、素材の獲得方法に円礫を用い、打面の作出後、石

刃が直接剥離される。打面部に対する調整は、石刃を剥離することにおこなうものと、再生程度のものがある。作業面に対する調整は、頭部へ頻繁におこなわれているが、稜を形成するような例がみられない。縦長剥片類の長幅比が2:1を超えるものが多く見られる。石器組成は、斜めに整形する二側辺加工、一側辺加工、部分加工の三形態のナイフ形石器、スクレイパー、彫刻刀、台形石器等を構成する。磯道遺跡の石器群は、剥片尖頭器、三稜尖頭器がみられないことから新段階の時期に相当するものと考えられる。

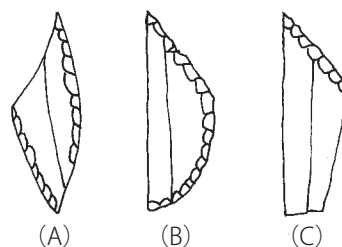
c. 東北地方と九州地方との比較

- i) 両地方の古段階の時期に急峻な二次加工を施すことによって利器類の形態を整えた石器が多く発見される。いわゆるナイフ形石器のブランテング技術である。ブランテング技術によって整えられた両側辺を加工する石器の刃部が不揃いであるが、刃部が基部に対して平行する形態、尖る形態（ペン先形）、斜行する形態が出現する。これらは、台形様石器と呼称され（佐藤 1988）、両地方の古段階の時期に共通して発見される。
- ii) 古段階の時期に東北地方では石器組成に刃部磨製石斧が伴うのに対し、九州地方ではその姿を消す。
- iii) 古段階の石器群は、打面の一定しない石核から寸詰まりの幅広い剥片類を剥離する技術が主体を占める点で両地域が共通している。
- iv) 東北地方の「暗色帯」、九州地方の「黒色帯」中に調整技術の未発達な石刃技法が出現する。これらの石刃技法は、打面を固定し、寸詰まり石刃や数枚の縦長剥片類を剥離するものの、二側辺が平行するような長大な「縦長剥片」ではない。
- v) 新段階の時期に調整技術の未発達な石刃技法が出現する点で共通する。この種の石刃技法から剥離された石刃は、二側辺の平行するような「縦長剥片」を呈する形状も看取されるが、先細りするものが多い。
- vi) 東北地方ではこの種の石刃を素材とし、その基部側の二側辺、先端部の一部に二次加工を施す形態のナイフ形石器が主体を占める。一方、九州地方では石刃を斜め整形した二側辺加工、一側辺加工、部分加工の三種類の形態が多くみられる（第5図）。新段階の時期にブランテング技術によって加工されるナイフ形石器の形態に相違が指摘される。
- vii) 新段階後半の時期には剥片を素材としてその背面側を打面、腹面側を作業面と固定しながら台形、貝殻状の小形の剥片類を横位へ連続剥離するような米ヶ森技法の発達が東北地方で看取される。九州地方ではこの技法は確認されていない。剥片を素材として一部にポジティブな面を残す小形剥片類を生産する

技術は両地方に先行する時期にも散見できる。

- viii) 東北地方では長大な石刃を剥離する目的で、打面や作業面に対する調整を頻繁におこなう石刃技法がA Tテフラの直下に出現する。調整技術の発達した石刃技法を基盤とする「東山系」と呼称される石器群は、石刃を素材として基部や先端に二次加工したナイフ形石器、エンド・スクレイパー、彫刻刀形石器を構成する石器群である。東北地方では調整技術の発達した石刃技法が後出する時期にも継続して製作され、大いに盛行する。九州地方では第2期、それ以降にも調整技術の発達した石刃技法は出現しない。ここに、両地方の大きな相違点を指摘することができる。

以上、両地方の第2期古段階は石器組成、石器製作技術に共通した様相が看取できるものの、ブランテング技術によって加工されるナイフ形石器の形態や刃部磨製石斧の有無に違いが現れる。さらに、第2期新段階になって東北地方では石刃の基部側の両側辺や先端部の一部に二次加工を施すナイフ形石器が多く見られるのに対し、九州地方では斜めに整形した二側辺加工、一側辺加工、部分加工の三形態が多く発見される。また、東北地方では「米ヶ森型台形石器」のような特殊な器種が一つの剥離技法と結びついて発見される。さらに、第2期最終時期に東北地方では調整技術の発達した石刃技法が出現する。日本列島内の両地方はA Tテフラの直下の時期に石器製作に違いが現れる。



第5図 ナイフ形石器の形態

3) 「暗色帯」・「黒色帯」の上位から出土する石器群

a. 東北地方：第3a期（古段階）

東北地方ではロームの堆積が薄いことから、遺跡で石器群が重複して発見される事例が少ない。それでも、奥羽山脈東側地域の岩手県内陸部で、数ヶ所の遺跡から層的事例が報告されている（高橋・菊池 1999）。筆者は「暗色帯」の上位から出土する石器群を後期旧石器時代第3期とし、さらに第3a期（古）、第3b期（新）に細分した（柳田 2006）。

第3a期の石器群は「暗色帯」に近い層準から発見される一群である。第3a期は、打面や作業面に丁寧な調整をおこ

ない、長大な石刃を生産する石刃技法が発達する。この時期の石器組成は、調整された石刃石核から剥離された長大な石刃を素材としたナイフ形石器、エンド・スクレイパー、彫刻刀形石器などで構成される。奥羽山脈東側地域の和賀川流域では第3a期の石器群が大渡Ⅱ遺跡と峠山牧場Ⅰ遺跡A地区で層位的に分離される。

また、大渡Ⅱ遺跡では石器包含層が泥炭層であるために「暗色帯」は不明であるが、ATの位置が確認されており、三枚の文化層が層位的に発見されている。第2・3文化層の石器群がAT上位で検出され、これらに調整技術の発達した石刃技法がみられる。第2・3文化層のナイフ形石器は、石刃を素材とし、基部側の形態が尖っており、先行する第1文化層とはやや異なる。大渡Ⅱ遺跡の第3a期の石器群は調整技術の発達した石刃技法を技術基盤とするものの、ナイフ形石器の基部側の形態にバリエーションがみられる。

第6図は、東北地方第3期の石刃を素材としたナイフ形石器の基部側の形態を中心に模式化した図である。大・中形の石刃を素材としたA類、中・小形の石刃を素材とした細身のB類に大別される。

さらに、A類はA1類～A4類に細別した。

- A1類：両側辺が直線的で箱形を呈する形態
 - A2類：円みをもちU字形を呈する形態
 - A3類：逆「ハ」の字を呈する形態
 - A4類：ノッチ状に加工し、柄をもつような形態
- これらの形態の多くは打面を僅かに残す。

また、B類はB1類～B3類に細別した。

- B1類：V字形を呈し、打面が点状に残存する形態
- B2類：V字形を呈し、打面が残存しない形態
- B3類：V字形を呈し、二側辺に加工が施され、一側辺は加工が先端部まで及ぶ

従来、「金谷原型」と呼称された山形県金谷原遺跡の石刃を素材とした基部加工のナイフ形石器は、打面を点状に残し、基部側を細身にする形態と考えられる(柏倉ほか1964)。

第3a期と推定される峠山牧場Ⅰ遺跡A地区の第3・4文化層のナイフ形石器の形態は基部側がU字形を呈する(A2類)。また、東北地方南部にある福島県一里段A、同県三貫地南・原口、同県弥明、宮城県山田上ノ台の各遺跡等の石器群も第3a期に位置づけられよう。弥明遺跡では「暗色帯」の上位の黄褐色ローム層中から角錐状石器、切出形のナイフ形石器、サム・スクレイパー等が打面を点状に残した細身の石刃製ナイフ形石器と発見されている(福島県教育委員会1992)。これらは南関東地方武蔵野台地の「IV下石器群」に類似する。新潟県樽口遺跡(第7図-26～30)(立木1996)や越中山K地点遺跡(加藤1975)からは近畿地方に分布する典型的な瀬戸内技法で製作された「国府系石器群」が発見されている(柳田1979)。また、上ミ野A遺跡のA群(第7図-31～33)の石器群からは基部側をノッ

チ状に加工し、柄をもつような形態の石器(第7図-31)、挟りの入った切出形を呈するナイフ形石器(第7図-33)、エンド・スクレイパー(第7図-35)が発見された(羽石ほか2004)。さらに、B群の石器群からは調整技術の発達した石刃技法を技術基盤とする基部と先端部側に加工したナイフ形石器、エンド・スクレイパー、彫刻刀形石器が出土した。A群のノッチ状に加工し、柄をもつような形態、挟りの入った切出形を呈する形態のナイフ形石器の石器は九州地方で多く分布する「剥片尖頭器」に類似する(清水1963)。B群(第7図-34～37)は東北地方にみられる調整技術の発達した石刃技法を技術基盤とする石器群である。上ミ野A遺跡ではA群とB群は別々の石器群とみなされているが、時期的には時間差のあまりない、第3a期のものと考えられる(傳田ほか2012)。

以上、第3a期には、東北地方南部や奥羽山脈西側で東北日本的な石器群の中に、西南日本から直接的、間接的な影響を受けた石器群が発見されている。

東北地方：第3b期(新段階)

この時期は第3a期よりも後出する石器群である。剥片生産技術は調整技術の発達した石刃技法が継続してみられる。また、石器組成は、石刃の基部や先端に二次加工を施したナイフ形石器、彫刻刀形石器、エンド・スクレイパー等で構成されている。第3b期は、第3a期と類似した石器組成で構成されるが、これらに槍先形尖頭器が加わる。峠山牧場Ⅰ遺跡A地区の第5文化層が第3b期に相当しよう(第7図-1～5)。この石器群が第3b期の指標となろう。峠山牧場Ⅰ遺跡A地区では、第5文化層が第3・4文化層(第3a期)の上位から層位的に検出されている。ここからは石刃の基部や先端に二次加工したナイフ形石器、彫刻刀形石器、エンド・スクレイパーと槍先形尖頭器が多量に発見されている。槍先形尖頭器(第7図-4)は形態が細身で、両面加工、周辺加工によって形状が整えられている。第5文化層のナイフ形石器は石刃を素材として基部や先端に二次加工する小形の形態(第6図-A・B類)が多い。形状は第3a期に比べると細身で小形である。また、第5文化層には両側辺に挟りが入り、「舌」部を持つような形態(第7図-1・2-A4類)、切出形を呈する形態のナイフ形石器もみられる。さらに、第3b期には、ナイフ形石器の基部側の加工は未加工の平行する両側辺とは明瞭に区分され、基部側が逆ハの字形を呈する形態も共存する(第6図-A3)。この遺跡以外に岩手県早坂平、和賀仙人、岩洞湖小石川、青森県大平山元Ⅱの各遺跡からも槍先形尖頭器が調整技術の発達した石刃技法と共存して発見されており、これらの石器群も第3b期に相当しよう。山形県お仲間林遺跡ではATと浅間-草津黄色軽石(A_s-YPK)に挟まれて槍先形尖頭器、調整技術の発達した石刃技法と共存する石器群が確認されている。年代観をテフラで絞りこめる石器

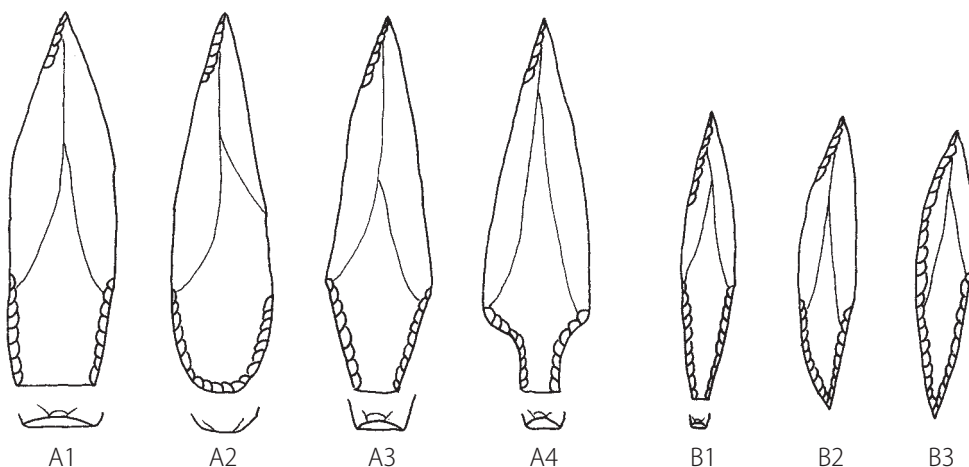
群である(阿部ほか 1995)。東北地方南部では背戸B(柳田1987)、谷地前C(玉川・芳賀 1980)、塩坪(藤原1983)の各遺跡が当該期と考えられる。背戸B石器群は、関東地方武蔵野台地の「IV上石器群」から出土するナイフ形石器の形態に類似しているものが多いが、石刃を素材として基部や先端に二次加工したナイフ形石器も共伴する(第7図-6~16)。背戸B石器群の石刃製のナイフ形石器の基部側の加工は、未加工の平行する両側辺とは明瞭に区分されるような形態を呈する(第7図-10-A3)。また、藤原によって「砂川期」に相当する時期に位置づけられた西会津塩坪遺跡の石器群も当該期の石器群と考えられる(藤原 1983)。ここでは槍先形尖頭器が共伴しない。

次ぎに、槍先形尖頭器を保有しない第3b期の石器群がある。一つは、山形県小国盆地の東山遺跡、新庄盆地の乱馬堂、南野、新堤、横前、秋田県小出IV、青森県大平山元II遺跡IIc文化層等の各石器群があげられる。従来、これらの石器群は東山系といわれたものに類似する。「東山系石器群」は石刃を素材とした基部加工ナイフ形石器、エンド・スクレイパー、彫刻刀形石器(小坂型)を組成する石器群とされた(加藤 1965)。両設打面から剥離された石刃を素材とし、基部側に僅かに加工したナイフ形石器はその定義が広く、この型式を組成する石器群をもって、第3a期、第3b期に位置づけることが難しい。ここでは、東山系の一群を時間幅の長い石器群として理解しておきたい。いま一つは、第3b期に位置づけられるものに、いわゆる「杉久保系」の石器群があげられる(第7図-17~22)。山形県横遺跡を代表とする一群である(柏倉・加藤ほか 1964)。石刃製のナイフ形石器は細身で基部側が尖る(第7図-17・18)。杉久保型と呼称される形態は打面を残置しないものと考えられる(第6図-B2類)。これに神山型彫刻刀形石器が加わる(第7図-20・21)。神山型彫刻刀形石器は秋田県鴨

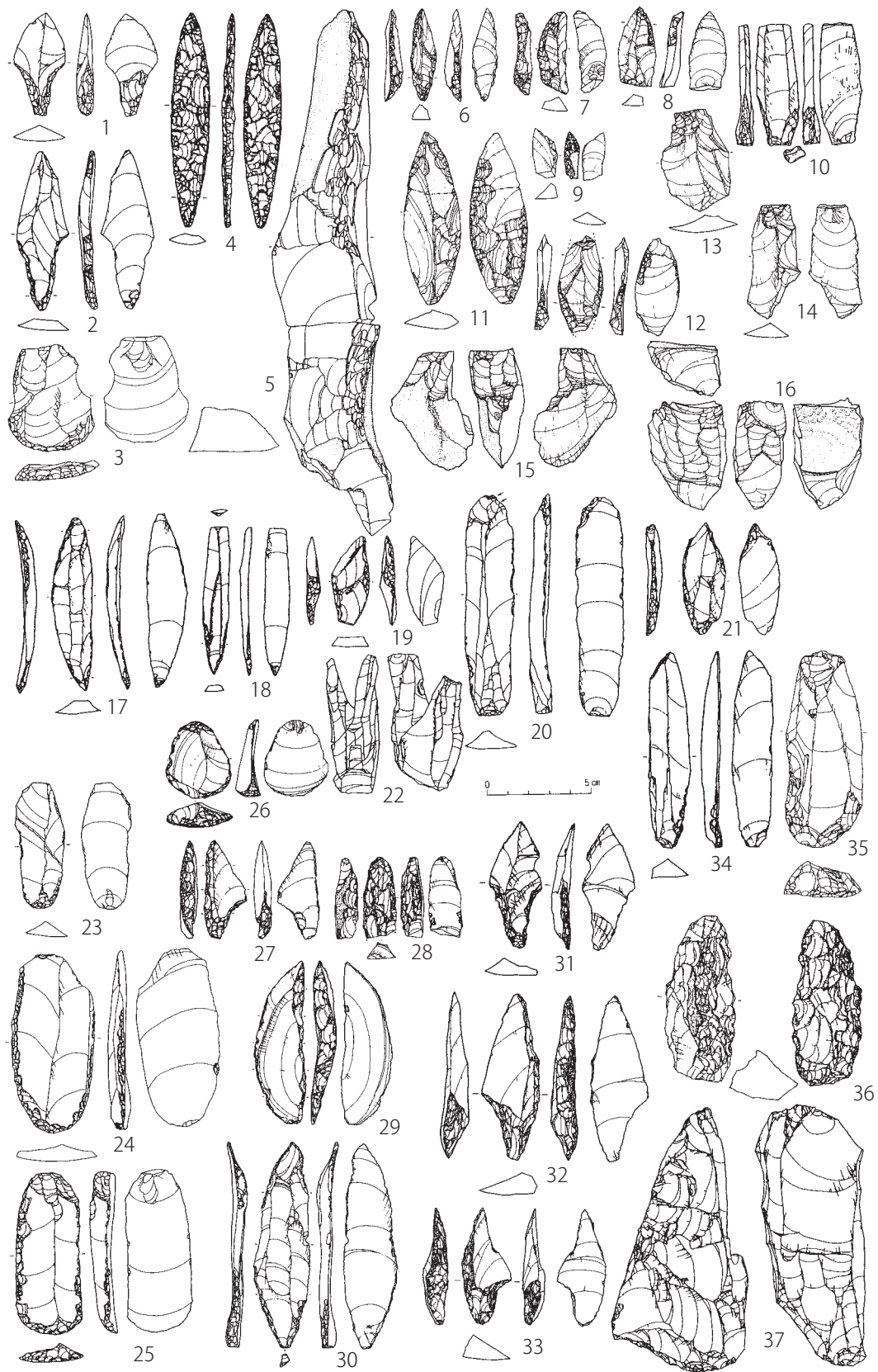
子台遺跡でも検出されているが、石刃製のナイフ形石器は基部側が尖るものの、二側辺に加工され、形態がやや異なる。東北地方の杉久保型のナイフ形石器は、会津地方に隣接する新潟県上ノ平遺跡や小国横道で発見されており、当地方に広く、薄く分布しているものの、奥羽山脈東側に多くみられる。

b. 九州地方：第3a期(古段階)

第3a期の石器群はAT層の直上か、それに近い層準から発見される。この時期の石器組成は、斜め整形した二側辺加工のナイフ形石器、一側辺加工のナイフ形石器、小形の切出形ナイフ形石器、刃部が平行する各種の台形石器、剥片尖頭器、三稜尖頭器、周縁調整尖頭器、スクレイパー、彫刻刀形石器、礫器などで構成されている。特に、プランティングで加工されたナイフ形石器は様々な形態を呈する。剥片生産技術は、規格性の強い縦長剥片類を連続剥離する石刃技法、打面と作業面を交互に入れ替えながら幅広剥片類を剥離する技術、石核の周縁から求心状に剥離する技術などがある。縦長、幅広の剥片類が石器の素材に供給される。さらに、東九州を中心に九州地方全域からは瀬戸内技法、国府型ナイフ形石器が発見されている。佐賀県神埼市船塚遺跡では、瀬戸内技法による翼状剥片、同石核、国府型ナイフ形石器とともに、斜めに整形した二側辺加工のナイフ形石器、剥片尖頭器、台形石器が出土している(八尋1984)。瀬戸内技法を保有する石器群が西北九州で在地性の強い石器類と共伴している点で注目される。第3a期の石器群の特徴は、第2期新段階の技術的な伝統の上に新たな器種と剥離技術が追加され、別な系統の石器類も付加される。特に、西北・東九州地域では、瀬戸内海周辺地域で発見されるような石器類が看取され、近年の調査ではそれらは九州全域で発見されている。新たな器種としては、剥片尖頭器、



第6図 東北地方のナイフ形石器の形態



第7図 暗色帯上部出土の石器群（東北地方）

三稜尖頭器等がみられ、これらも九州全域に分布する。さらに、台形石器は「原ノ辻型」、「枝去木型」などの形態が出現する。第3a期の代表的な石器群として、大分県岩戸遺跡第I文化層(第8図-52~56)(芹沢編1978、柳田1983)、同岩戸D文化層(第8図-57~66)(坂田1980)、同岩戸第6層下部(第8図-45~51)(清水ほか1986)をあげておきたい。九州地方では1976年以降、AT層の上位からテフラとの関連で石器群が次々と発見され、その遺跡数は枚挙に遑がない。代表的なものとして、長崎県百花台遺跡、熊本県下城遺跡第1文化層、同県石飛分校遺跡第4層、同県百枝遺跡第II文化層、鹿児島県上場遺跡第4層下層、宮崎県清武町堂地西遺跡第IV層の石器群が古くから調査されている。特に近年、高速道路の延長にともなう宮崎県、鹿児島県では当該期の石器群が続々と発掘調査されている。この他に、テフラ分析がおこなわれていないが、九州地方で古くから調査されている佐賀県平沢良遺跡(杉原、戸沢1962)、長崎県度島中山遺跡第3・4層(萩原1977)、同日ノ岳遺跡II・III層(下川・立平1981)、西輪久道遺跡上・下層(長崎県教委1981)等の西北九州地域で発見された石器群も当該期といえよう。第3a期に出現する剥片尖頭器は縦長剥片を素材とし、打面部に両側辺からノッチ状の調整剥離を施した基部をもつ石器である(第8図-57・58)。素材となった剥片の形状をあまり変化させないことから、この名称が用いられた(清水1973)。剥片の末端部、一側辺、二側辺などに急峻な調整剥離がおこなわれ、形態的なバリエーションがあるものの、基部(柄)をつくり出すような共通した特徴がある。九州地方全域に多く分布し、他の地域であまり発見例が少ない。第3a期のみ出現する。韓半島で「スンベチルゲ」と呼称され、「剥片尖頭器」に類似する石器は、近年、この地域で多く発見されることから、その起源が日本列島以外の地域に求められている。三稜尖頭器(第8図-48・49)は断面が三角形を呈し、調整された二面の稜からも二次加工が施される尖頭器である。二面加工(同図-48)、三面加工の尖頭器であり、筆者はそれらを三稜尖頭器と呼んだ(柳田1983)。周縁調整尖頭器は断面形が台形状を呈し、周縁部を腹面側からのみ調整剥離している。調整剥離の角度が急峻であり、ナイフ形石器の背部に類似する。三稜尖頭器、周縁調整尖頭器は角錐状石器(西川・杉野1957)などと呼称された石器類に類似しており、調整技術に若干の相違がみられるものの、形態的には同一器種として類型化できる石器と考えられる。近年、これらの石器を角錐状石器と呼称することが多くなっており、第3a期の限られた時期に盛行する。現在のところ、槍先形尖頭器は長崎県福井洞穴第4層、大分県上下田遺跡上層から細石刃を主体とする石器群と共伴して検出されているのが確実な資料であるが、細石刃文化期に先行する時期、第3期には槍先形尖頭器が発見されていない。

九州地方：第3b期(新段階)

第3b期の石器群は第3a期の上位で発見される石器類である。東九州では大分県岩戸6層上部(第8図-11~28)(須田1986)、同岩戸B文化層の石器群(坂田1980)が最初に第3a期の上位で検出された。これらの石器群は、縦長剥片の打面部を基部として、基部と先端部に二次加工を施した特徴的なナイフ形石器が組成する。この種のナイフ形石器は第3a期にも散見できるが、後出する第3b期に盛行するものと言え、後期旧石器時代の後半期の特徴的なナイフ形石器として注目される。この他に、当該期に切出形ナイフ形石器(第8図-25)やスクレイパーが共伴している。第3a期にみられた基部側にノッチが入る切出形ナイフ形石器、剥片尖頭器、三稜尖頭器、周縁調整尖頭器類は組成しない。ナイフ形石器に供給される剥片生産技術は、大形剥片を素材とし、その打面から腹面と背面のなす稜を利用して目的とする縦長剥片を剥離した石刃技法である。長さが大きくないが、規格性が強く、生産性の高い石刃技法といえる。縦長剥片やそれを素材としたナイフ形石器の背面側にはポジティブな剥離痕がよく観察される。当該期の石器群に類似するものとして熊本県上高橋遺跡があげられる(古森1981)。

西北九州では長崎県堤西牟田遺跡IV層(第8図-33~44)(萩原1988)や福岡県原の東遺跡9a層から出土した石器群(杉原1979)があげられる。これらは小形の石刃や基部と先端部に二次加工を施したナイフ形石器が組成する。また、小形の石刃類以外に、剥片を素材とし、円盤形石核や切出形ナイフ形石器が発見されており、いずれも小形化している。岩戸6層上部、岩戸B文化層の石器群に類似する。さらに、第3b期の石器群は瀬戸内海周辺地域(岡山、香川)の国府期以降の石器群と関連することも考えられ、その拡がりには西南日本を包摂しているようだ。また、西北九州では、岩戸6層上部、岩戸B文化層に類似しない石器群として、百花台第III文化層(麻生・白石1976)のように、第3a期の石器群の上位から層位的に確認されているものがある。石器組成は、いわゆる「百花台型」の台形石器(第8図-1・2)を主体とし、二側辺加工のナイフ形石器、スクレイパーがみとめられる。剥片生産技術には小形の縦長剥片が多量に存在するが、その作出技術がまだ不明である。

近年の宮崎平野において、岩戸6層上部、岩戸B文化層に類似する第3b期の石器群が発掘調査によって続々と発見されている(宮崎旧石器談話会2005)。宮崎県南学原第1遺跡(第8図-29~32)、同県野首第2遺跡の調査では、縦長剥片に打面部と先端部を二次加工した小形のナイフ形石器類、「角」のある「百花台型」の台形石器、切出形ナイフ形石器が発見された。これらは大形剥片を素材とし、その打面から腹面と背面のなす稜を利用して目的とする縦長剥片が剥離されている(山田・日高2002)。また、鹿児島県では小形のナイフ形石器、台形石器類が細石刃文化に先



第8図 黒色帯上位出土の石器（九州地方）

行して発見される石器群がある。瀬戸頭A遺跡（第8図-3～10）では、細石刃文化をとまわずにVII b層で小形の台形石器類が出土している（鹿児島埋文 2005）。この石器群も第3 b期に含めておきたい。

以上、第3 b期の石器群は、小形石刃核や小形円盤石核から剥離された石刃や幅広剥片を素材とし、「百花台型」の台形石器、小形の石刃を素材とする基部と先端に二次加工したナイフ形石器、小形の切出形石器が組成する。第3 a期でみられた、斜め整形の二側辺加工のナイフ形石器、剥片尖頭器、三稜尖頭器、周縁調整尖頭器類が第3 b期には石器組成から姿を消す。さらに、瀬戸内技法で製作された国府型ナイフ形石器も組成しない。鎌田洋昭は、この時期に南九州では切出形石器、東九州では石刃を素材とする基部と先端に二次加工したナイフ形石器、西北九州では「百花台型」の台形石器が、それぞれ分布を異にして発見されていることを指摘した（鎌田 2004）。近年の調査では三者はその分布に密度差があるものの、九州地方第3 b期に共存して検出される例も見られるようである。

c. 東北地方と九州地方との比較

- i) この時期に石刃技法が剥片生産技術中にしっかりと定着する点で両地域は共通している。
- ii) 両地方の石刃技法に製作上の相違が見られる。東北地方では第3 a期に打面部と作業面に丁寧な調整が頻繁におこなわれ、見事な縦長の石刃が剥離される。いわゆる調整技術の発達した石刃技法が盛行する。この技術は先行する第2期の終末期に出現した「東山系石刃石器群」の技術を受け継いだものであろう。これらは第3 b期まで継続し、後出する細石刃文化期まで残存する事例もみられる。一方、九州地方の石刃技法は打面部と作業面に丁寧な調整作業をおこなわず、縦長剥片を剥離する。この地域では東北地方のような長大な石刃は剥離されない。第3 b期には九州地方では剥片類を素材とし、その打面部から、腹面と背面によって側辺にできる稜を利用して、目的とする石刃を剥離した石刃技法が盛行する。九州地方では調整技術を駆使する石刃技法は第3期に一貫して看取することができない。第3期は両地域の石刃技法の調整技術の差に大きな相違を指摘することができる。
- iii) 両地方の剥片生産技術の依存度に相違性がみられる。東北地方では打面部と作業面への丁寧な調整作業をおこなう石刃技法が石器群の主体を占めるのに対し、九州地方は打面と作業面を頻繁に移動させながら幅広な剥片を剥離するものや、打面部や作業面への丁寧な調整作業をおこなわない石刃技法がみられる。また、石器群中に瀬戸内技法が量的に僅少であるもののそれらは確実に共存する。九州地方は多様な剥

片生産技術が一つの石器群中にみられる。ここに相違を指摘することができる。

- iv) 両地方のナイフ形石器の形態やその組成上に相違が見られる。第3 a期において東北地方は石刃の基部の両側辺、先端部の一部に二次加工を施す形態が多いのに対して、九州地方においては、斜めに整形する二側辺加工、一側辺加工、部分加工の三形態が保持されている。さらに、後続する第3 b期の石器群において、東北地方では調整技術の発達した石刃技法から製作された石刃の基部側の両側辺、先端部の一部に二次加工を施すナイフ形石器が残存し、新たに両面を加工した槍先形尖頭器が出現する。一方、九州地方では、小形石刃の基部側と先端部に二次加工を施す形態、小形の切出し状のナイフ形石器、小形の「百花台型」の台形石器が新たに石器組成の一員として加わる。二面に加工された槍先形尖頭器は九州地方では未だ発見されておらず、その有無に対して大きな相違も指摘される。
- v) 第3 a期には九州地方で剥片尖頭器、三稜尖頭器、周縁調整尖頭器が新たに出現する。東北地方は石刃を素材としたエンド・スクレイパーや彫刻刀形石器がこの時期、多量に発見される。後者は東山系の石刃石器群と呼称され、すでに第2期の最終段階に出現している。第3 a期に両地域で新たな器種が登場する点で石器組成上に大きな相違が認められる。
- vi) 第3 a期には山形県越中山K地点遺跡や新潟県樽口遺跡において三稜尖頭器、周縁調整尖頭器が出土しているものの、東北地方ではその分布が濃密ではない。むしろ、これらは西南日本や近畿地方の国府系石器群から直接的影響を受けたと判断される特殊な遺跡と考えられる。両地域では第3 a期に国府系石器群が散在するが、東北地方では各工程が近畿地方に類似する瀬戸内技法が発見されるのに対して、九州地方は工程間に様々な違いがみられるものや、一貫して規格性を保つものも発見される。

以上、両地方の第3期は石器組成、石器製作技術に大きな相違が見られる。この違いは第2期新段階から始まっているものの、第3 a期の古い段階に顕著に現れる。一つは石器組成上の違いであり、いま一つは石刃技法の依存度である。また、両地方はこの時期に近畿地方の「国府系石器群」からの直接的、間接的な影響があったといえる石器が発見されている。

4. ま と め

ここでは北部に位置する東北地方の「暗色帯」と西南部に所在する九州地方の「黒色帯」を基準に、その上・中・下位から出土する石器群を比較した結果について整理し、日本列島の地域性が成立する時期を考えてみたい。

1) 「暗色帯」・「黒色帯」の下位から出土する石器群

① 後期旧石器時代初頭の時期に両地方は石器組成が両面・半両面加工の石器、基部加工のナイフ形石器、鋸歯縁スクレイパーで構成される。さらに、両地方には刃部磨製石斧が出現する。石器組成に共通性がみられる。

② 剥片生産技術は打面と作業面の転移を頻繁に繰り返し、剥片類が生産される技術が主体である。剥片類の形状は、三角形や台形を呈する幅広なものや、背面の一部にポジティブな面を残す貝殻状を呈するものがみられる。ただし、この時期は二側辺の平行するような「縦長剥片」類がみられるものの、量的には僅少ではある。打面を固定し、打面や作業面を頻繁に調整するような石刃技法は見られない。調整技術の発達した石刃技法が看取できない点、両地方は剥片生産技術に共通性がみられる。

③ 石器類に施される二次加工技術は面的なものが多い。

以上、両地方には石器組成、剥片生産技術、石器製作技術に共通性がみられる。

2) 「暗色帯」・「黒色帯」の中から出土する石器群

④ 刃部磨製石斧類の消滅する時期に違いが認められる。東北地方では引き続き刃部磨製石斧が組成するのに対して、九州地方では発見例が無くなる。

⑤ ナイフ形石器の形態に相違が見られる。東北地方のナイフ形石器は石刃の基部の両側辺、先端部の一部に二次加工を施す形態が多く製作されるのに対し、九州地方の形態は、斜めに整形する二側辺加工、一側辺加工、部分加工の三形態が多くみられる。

⑥ 両地方の新段階に類似する「石刃技法」が出現する。打面を固定化するが、これらは、打面や作業面を頻繁に調整するような技術をもたない「縦長剥片」を生産する「石刃技法」である。

⑦ A Tテフラ層直下の時期（「暗色帯」の最上部の時期）に東北地方では、打面部と作業面へ丁寧な調整を頻繁におこない、長大な縦長の剥片類を剥離する技術が出現する。長大な石刃を連続的に剥離する石刃技法である。九州地方では打面部や作業面に対する調整作業がおこなわれず、「石刃状」の縦長剥片を剥離する。特に、作業面の稜を作り出すような調整作業がみられない。両地方の違いは石刃の大きさに顕著に現れる。

⑧ 東北地方の新段階に特殊な剥離技法が出現する。「暗色帯」の上部から東北地方では先行する時期に見られた剥

片を素材とする石核から一部にポジティブな面を取り込むような技術が「米ヶ森技法」と呼称される定型化したものに発達する。多量に生産されたポジティブな面を有する貝殻状の剥片類が「米ヶ森型台形石器」に供給され、これらは当該期の特徴的な石器となる。九州地方にこの技法の発見がない。

⑨ 東北地方では硬質頁岩、九州地方ではスレート、黒曜石、チャートが主体的に利用される点で石材の使用方法が際だって異なってくる。東北地方では硬質頁岩が多用される。九州地方では先行する時期に石英脈岩、安山岩、サヌカイト、ホルンフェルス、スレート等が使用され、それ以降の時期から石材に黒曜石の使用が増加する。また、両地方では遺跡によって凝灰質頁岩、メノウ、玉髄、チャート、流紋岩、黒曜石、石英岩、水晶等が主体的に利用される場合がある。両地方とも在地の石材を多く採集し、使用する。石材の産出する地域的な違いに由来するものであろう。

以上、両地方は、新段階に調整技術の未発達な「石刃技法」が出現する点で共通性がみられる。しかし、刃部磨製石斧や米ヶ森技法の有無、ナイフ形石器の形態、石材等に相違がみられるようになる。

3) 「暗色帯」・「黒色帯」の上位から出土する石器群

⑩ 両地方の古段階に石刃技法の製作に相違がみられる。東北地方では、打面部と作業面へ丁寧な調整を頻繁におこない、長大な縦長の剥片類が剥離される。長大な石刃を連続的に剥離する石刃技法である。九州地方では打面部や作業面に対する調整作業がおこなわれず、「石刃状」の縦長剥片を剥離する。特に、作業面の稜を作り出すような調整作業がみられない。両地方の違いは石刃の大きさに顕著に現れる。この「石刃石器群」の違いは、A Tテフラ層直下の時期（「暗色帯」の最上部）から現れる。

⑪ 両地方の古段階は石器素材の選択が異なる。東北地方では石刃技法から製作された剥片類を素材とした石器類が特化し、ナイフ形石器、エンド・スクレイパー、彫刻刀形石器に供給される。東北地方では石刃技法の依存度が高い。九州地方では斜めに整形する二側辺加工のナイフ形石器と剥片尖頭器類は、その素材が「石刃技法」から生産された「石刃」で製作される。それ以外は他の剥片類が素材に供給されたのであろう。これらの剥片は打面と作業面を頻繁に移動し、幅広な剥片を剥離する剥片生産技術である。切出形石器、台形石器、三稜尖頭器、周縁調整尖頭器石器等はこの剥片類が供出されている。

⑫ 古段階に九州地方では基部を作り出した「剥片尖頭器」が突如出現し、新段階に消滅する。それらは、韓半島で濃密に分布することから、「剥片尖頭器」類の起源はこの地域より拡散したことが予想される。同様なことは三稜尖頭器、周縁調整尖頭器石器の起源にも及ぶ。東北地方はこれらの石器類は僅少である。

⑬ 古段階に瀬戸内海周辺地域で多く検出されている「国府系石器群」が両地方から出土する。分布密度に違いがみられるものの、石器群の中に「瀬戸内技法」で製作された翼状剥片、石核、国府型ナイフ形石器が見られる。両地方では分布の密度が決して高くないことや、石器群の発生・盛行を確認できないことから、これらの石器類を製作した技術は、より多く発見される瀬戸内海周辺地域で生み出され、そこから拡散したものと推定される。また、両地方では、近畿地方で示された「瀬戸内技法」の盤状剥片の製作段階（第1工程）にも相違が看取できる（松藤 1974）。

⑭ 新段階の石器群に両地方で小形化する現象が共通してみられる。東北地方では、石刃の基部側と先端部に二次加工を施すナイフ形石器に小形化する傾向がみられる。九州地方でも小形化した同形態のナイフ形石器が増加する。「百花台型」の台形石器、切出し状の二側辺加工のナイフ形石器は小形化した形態として残存したものと考えられる。

⑮ 新段階の石器群に石器組成上に相違がみられる。東北地方は両面を加工した槍先形尖頭器が出現するのに対し、九州地方では、古段階に二・三面を加工した断面三角形の三稜尖頭器が出現するが、新段階の石器群に断面が凸レンズ状の二面を加工する槍先形尖頭器の存在例が未だ確認されていない。九州地方の両面を加工した槍先形尖頭器の出現は細石刃文化期以降である。

⑯ 降下テフラとの関係で見た場合、両地方は東北地方が北部地域に分布する十和田一八戸軽石（TO-HP - 1.45 ~ 1.7 万年前）以降、九州地方では南部地域的小林軽石（Kr-Kb - <1.6 万年前）以降に「細石刃技法」の製作が開始される。おそらく、約 1.5 万年前を前後する時期に、後期旧石器時代の急斜度加工を多用するナイフ形石器や小形化した石刃技法が無くなる。その後、細石刃石器群は短期間で拡がり、やがて終末期を迎える。両地方の細石刃石器群の出現・盛行・終末の時期は共通していると考えられる。

以上、後期旧石器時代において、その初頭に位置づけられる「暗色帯」・「黒色帯」の層の下位から出土する石器群に共通性がみられたものの、時間の経過する中で、両地方の相違は徐々にあらわれてくる。後期旧石器時代に両地方で地域的な大きな違いがみられるのは「暗色帯」・「黒色帯」の上位より出土する石器群からである。その相違とは、素材を得るための「石刃技法」に対する依存度と石器組成である。東北地方では、石核の打面や作業面に対して調整を駆使し、長大な石刃を獲得する。石器組成には石刃を素材とした基部と先端に加工したナイフ形石器、エンド・スクレイパー、彫刻刀形石器等が多くみられる。東北地方は剥片生産技術の中で石刃技法の依存度が高い。一方、九州地方は依存度が低い。石器組成を構成する中身は、石刃技法以外の剥片生産技術で剥離されたが器種が多い。多様な型式をもつ台形石器、切出形石器、三稜尖頭器等があげられる。九州地方はそれぞれの目的に応じて素材が生産されたから

であろう。このように、「石刃技法」に対する依存度が地域的な違いとなって明瞭になって現れたのは、「暗色帯」・「黒色帯」の上位より出土する石器群からである。しかし、石器組成や剥片生産技術の違いは先行する「暗色帯」・「黒色帯」の層の中位の石器群にもみいだされ、その初動はこの時期からはじまったものと言える。

注

注1. 本論では、須賀川市博物館収蔵がする石器のみを使用した。

注2. 狸谷遺跡第1文化層からは小形の剥片を素材とした斜め整形の二側辺加工、一側辺加工、部分加工の三形態のナイフ形石器が出土しているが、剥片生産技術に石刃技法を確認することができない。ATの下位の「黒色帯」層中にあるものの、この層の細分が不明であることから積極的に古段階に位置づけることはむずかしい。

謝辞：この小論を執筆するにあたって、次の方々から御教示いただいた、記して感謝申し上げます。東北大学大学院文学研究科考古学研究室 阿子島 香教授、鹿又喜隆准教授、佐野勝弘助教

引用文献

- 秋田市教育委員会 1983『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書—下堤G遺跡—』
 麻生 優・白石浩之 1976「百花台遺跡」『日本の旧石器文化—遺跡と遺物—（下）』第3巻 pp.191～213
 阿部祥人・岡沢祥子・工藤敏久・渡辺文彦編 1995『お仲間林遺跡の研究—1992年発掘調査—』慶應義塾大学文学部 民族学・考古学研究室
 安齋正人・佐藤宏之編 2006『旧石器時代の地域編年的研究』同成社
 池田朋生 1999『石の本遺跡II』熊本県文化財発掘調査報告 第178集 熊本県教育委員会
 池水寛治 1967「鹿児島県出水市上場遺跡」『考古学集刊』第3巻第4号 pp. 1～21
 江本 直 1984『曲野遺跡II』熊本県文化財発掘調査報告 第65集 熊本県教育委員会
 大井晴夫 1968「日本の先土器時代石器群の系統について」北方文化研究 第3号 pp.45～93
 大野憲司ほか 1985『七曲台遺跡群発掘調査報告書—』秋田県文化財調査報告書 第125集 秋田県教育委員会
 緒方 勉・古森政次 1980『下城遺跡II』熊本県文化財発掘調査報告 第50集
 小野 昭 1969「ナイフ形石器の地域性とその評価について」『考古学研究』第16巻 第2号
 柏倉亮吉・加藤 稔・宇野修平・佐藤禎宏 1964『山形県無土器文化』山形県教育委員会
 加藤 稔 1965「東北地方の先土器時代」『日本の考古学—先土器時代—』pp.198～221
 加藤 稔 1975『越中山遺跡』『日本の旧石器文化』2 一遺

- 跡と遺物— 上 pp.112-137 雄山閣
- 鹿又喜隆 2005 「東北地方後期旧石器時代初頭の石器の製作技術と機能の研究—岩手県胆沢町上萩森遺跡Ⅱ b文化層の分析を通して—」『宮城考古学』第7号 pp.1~26
- 鎌木義昌 1965 「刃器文化」『日本の考古学』第1巻(先土器時代) pp.131~144
- 鎌木義昌・間壁忠彦 1965 「九州地方の先土器文化」『日本の考古学』第1巻(先土器時代) pp.303~322
- 鎌田洋昭 2004 「九州における細石器文化開始期について—ナイフ形石器文化終末期の様相を踏まえて—」『九州旧石器』第8号 pp.99~116
- 菊池強一 1988 『上萩森遺跡—調査報告書—』胆沢町埋蔵文化財調査報告書 第19集 胆沢町教育委員会
- 菊池強一 1996 「—1994年度に注目された発掘調査の概要—岩手県北上中流域の群—特に金ヶ崎町柏山館跡湯田町・峠山牧場Ⅰ遺跡・湯田町大渡Ⅱ遺跡・宮守村金取遺跡について—」『日本考古学年報』pp.478~481
- 木崎康弘 1987 『狸谷遺跡』熊本県教育委員会
- 木崎康弘 1988 「九州ナイフ形石器文化の研究—その編年と展開—」『旧石器考古学』第37号 pp.25~43
- 木本元治・岡村道雄・千葉英一 1975 「第1編 平林遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告』福島県教育委員会
- 黒田篤史 2005 『金取遺跡—第2・3次発掘調査報告—』宮守村文化財調査報告書 第8集
- 小林達雄・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男 1971 「野川先土器時代遺跡の研究」『第四紀研究』第10巻 第4号 pp.231~252
- 坂田邦洋編 1980 『大分県岩戸遺跡』
- 佐久間光平 2006 「東北地方における北方系細石刃石器群の波及と展開」『宮城考古学』第8号 pp.17~38
- 佐藤宏之 1988 「台形様石器序論」『考古学雑誌』第73巻 第4号 pp.1~37
- 清水宗昭 1973 「剥片尖頭器について」『古代文化』第25巻 11号 pp.375~382
- 清水宗昭・柳田俊雄・須田良平・高橋信武 1986 『大分県岩戸遺跡—大分県大野郡清川村所在の旧石器時代遺跡第3次調査報告書—』清川村教育委員会
- 下川達弥・立平 進 1981年 『日ノ岳遺跡』長崎県立美術館
- 主浜光朗 1995 『上ノ原山遺跡—国道286号線(茂庭工区)改良工事関係発掘調査報告書—』仙台市文化財調査報告書 第198集 仙台市教育委員会
- 菅原俊行 1983 「下堤G遺跡(先土器時代)発掘調査概報」『秋田市秋田臨空港新都心関係文化財発掘調査報告書埋蔵調査報告書』pp.137~161
- 杉原荘介・戸沢充則 1962年 「佐賀県伊万里市平沢良発見の石器文化」『駿台史学』12号 pp.10~35
- 須田良平 1986 「第3章第4トレンチ出土の石器(第6層上部出土の石器群)」『岩戸遺跡—第3次発掘調査報告—』大分県清川村教育委員会 pp.24~43
- 杉原荘介 1956 『群馬県岩宿発見の石器文化』明治大学文学部研究報告 考古学 第一冊 東京 明治大学
- 芹沢長介 1956 「日本に於ける無土器文化」『人類学雑誌』第64巻 第3号 pp.31~43
- 芹沢長介 1957 『考古学ノート 先史時代(1)—無土器時代—』日本評論新社
- 芹沢長介 1963 「無土器時代の地方色」『国文学解釈と鑑賞』第28巻 第5号 pp.19~27
- 芹沢長介編 1978 『岩戸』東北大学文学部考古学研究室—考古学資料集—第2冊
- 芹沢長介 1979 「日本旧石器時代の編年について」『考古学ジャーナル—特集 旧石器文化の諸問題—』NO.167 pp.2~6
- 副島和明・伴耕一郎 1985 『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』Ⅱ長崎県教育委員会
- 高橋義介・菊池強一 1999 『峠山牧場Ⅰ遺跡A地区発掘調査報告書—東北横断自動車道秋田線関連遺跡発掘調査—』(第1・2分冊)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第291集 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 橘 昌信 1985 『駒方古屋遺跡』別府大学付属博物館
- 橘 昌信・佐藤宏之・山田 哲編 2002 『後牟田遺跡—宮崎県川南町後牟田遺跡における旧石器時代の研究—』後牟田遺跡調査団 川南町教育委員会
- 立木宏明 1996 『奥三面ダム関連発掘調査報告書V 樽口遺跡』朝日村文化財報告書 第11集
- 傳田恵隆 佐々木智穂 鹿又喜隆 阿子島香 柳田俊雄、2012 「最上川流域の後期旧石器時代の研究2—上ミ野A遺跡第3次発掘調査報告」『Bulletin of the Tohoku University Museum』No.11 pp.1~200
- 富樫泰時・藤原妃敏他 1978 『米ヶ森遺跡発掘調査報告書』協和町教育委員会
- 戸谷 洋・貝塚爽平 1956年 「関東ローム層中の化石土壌」『地理学評論』第29号 pp.339
- 中川久夫・岩井淳一・大沼昭二・小野寺信吾・森 由紀子・木下 尚・竹内貞子・石田琢二 1963 「北上中流域沿岸の第四系および地形—北上川流域の第四紀地史(2)—」『地質学雑誌』第69巻 第812号 pp.219~227
- 中川重紀・吉田充 1993 『大渡Ⅱ遺跡の発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第215集
- 西川宏・杉野文一 1957 「岡山県玉野市宮田山西地点の石器」『古代古備』第3号 pp.1~9
- 芳賀英一・玉川一郎 1980 「谷地前C遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告』V 福島県教育委員会
- 萩原博文 1977 「長崎県平戸市度島町湯牟田中山遺跡」平戸市教育委員会
- 萩原博文編 1985 『堤西牛田』長崎県平戸市教育委員会
- 羽石智治・会田容弘・須藤 隆 2004 「最上川流域の後期旧石器時代の研究1—上ミ野A遺跡第1・2次発掘調査報告書」(東北大学大学院文学研究科考古学研究室)
- 藤原妃敏ほか 1983 『塩坪遺跡発掘調査概報』福島県立博物館調査報告 第3集
- 藤原妃敏 1984 「東北地方における後期旧石器時代石器群の技術基盤—石刃石器群を中心として—」『考古学論叢』pp.62~90
- 藤原妃敏 1988 「桑折町平林遺跡の剥片生産技術(Ⅰ) 縦長剥片生産技術(石刃技法)」『福島考古』第29号 pp.13~23
- 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター 1992 国営総合農地開発事業 『母畑地区遺跡調査報告32』「弥

- 明遺跡」福島県文化財調査報告第278集
- 町田洋・新井房夫 1976「広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義」『科学』第46巻 pp.339～347
- 町田洋 1980「岩戸遺跡のテフラ（火山灰）」『大分県岩戸遺跡』坂田邦洋編 pp. 443～453
- 町田洋 新井房夫著 2003『新編火山灰アトラス』[日本列島とその周辺] 東京大学出版会
- 松藤和人 1974「瀬戸内技法の再検討」『ふたがみ—二上山北麓石器時代遺跡群分布調査報告—』同志社大学旧石器器談話会 pp. 138～163
- 三重町教育委員会 1999『牟礼越遺跡—三重地区遺跡群発掘調査報告書—』
- 宮崎旧石器器談話会 2005「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学』第66号 pp. 47～61
- 柳田俊雄 1979「近畿地方における国府石器群の様相—剥片生産技術の多様性—」『考古学ジャーナル』No.167 pp. 53～57
- 柳田俊雄 1982「瀬戸内技法の打面調整の意味」『郡山女子大学紀要』第18集 pp. 197～208
- 柳田俊雄 1983「大分県岩戸遺跡第Ⅰ文化層出土の石器群の分析とその位置づけ」『考古学論叢』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会編 pp. 25～62
- 柳田俊雄 1986入門講座「日本の旧石器—第13回—九州地方（2）—」『考古学ジャーナル』No. 268号 pp. 18～22
- 柳田俊雄 1987「阿武隈川流域における旧石器時代の研究1—福島県石川郡石川町背戸B遺跡の発掘調査報告（1）—」『福島考古』第28号 pp.1～32
- 柳田俊雄 1988「東九州の石刃技法の変遷」『古代文化』第40巻第7号 pp. 1～18
- 柳田俊雄 1995「会津笹山原遺跡の旧石器時代石器群の研究—石刃技法を主体とする石器群を中心に—（A）笹山原A遺跡—」『郡山女子大学紀要』第31集 第2号 pp. 1～90
- 柳田俊雄・早田勉 1996「福島県須賀川市乙字ヶ滝遺跡の発掘調査報告—後期旧石器時代前半期の石器群—」『福島考古』第37号 pp. 1～22
- 柳田俊雄 2004「東北地方中南部地域の「暗色帯」とそれに対応する層から出土する石器群の特徴について」『Bulletin of the Tohoku University Museum』No.3 pp. 69～89
- 柳田俊雄 2006「東北地方の地域編年」『旧石器時代の地域編年的研究』安齋正人・佐藤宏之編 pp. 141～172
- 柳田俊雄 2010「大分県岩戸遺跡における三調査の整理と再評価—本石器群の層位的事例と九州地方の旧石器時代編年—」『Bulletin of the Tohoku University Museum』No.9 pp.49～110
- 八尋実 1984年『船塚遺跡』神埼町教育委員会
- 山田洋一郎 日高広人 2002『南学原第1遺跡 南学原第2遺跡』一般県道副王寺佐土原線道路改築事（船野工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第50集
- 吉留秀敏ほか 1984「駒方C遺跡の調査」『大野原の先史遺跡』pp.14～72